宗像

沖津宮現地大祭

～約二五〇人が渡島参拝～

年に一度、一般参拝者の渡島が許される沖津宮現地大祭が、五月二十七日沖ノ島で斎行された。

厳正な抽選の結果選ばれた約二五〇名の参加者は、前日の二十六日に筑前大島に渡島、同島鎮座の中津宮に参集し午後六時からの沖ノ島渡島安全祈願祭に参列、翌日の無事渡島を祈念した。

引き続き境内で説明会が行われ、十班に分かれた参加者は各班ごとに担当神職の諸注意に耳を傾け、その夜は各自大島の民宿に宿泊参籠した。

翌朝、朝焼けの中、先ず第七管区海上保安本部巡視船『げんうん』が出港した。過去何度か波の高さにより途中で引き返し、渡島が中止になったこともあるが、今回は凪ですぐに出港許可が出され、午前七時渡海船『しおかぜ』をはじめ全船出港。

大島に残る方々が手を振る中、参拝者を乗せた船団は沖ノ島を目指した。朝凪で鏡のような海上を進むこと約一時間半、目前に沖ノ島が現れた。

到着した参拝者から順次、一糸まとわぬ姿になり海中での禊を行い心身を清め、原生林の生い茂る参道を沖津宮本殿へと上った。

午前十時に現地大祭を斎行。御神前には全国各地の参拝者からの御神酒・奉献品がお供えされ、神島宮司が国家・皇室の安泰、国民の幸福、そして日本海々戦で国のために命をかけて戦った日露両国の兵士の慰霊・世界平和を祈る祝詞を奏上。次々に各代表者が玉串を捧げて、敬虔な祈りの中祭典は滞りなく終了した。

その後、波止場で沖・中両宮奉賛会、翼賛会、沖ノ島仲間の皆様により調理された刺身、煮魚、そ

沖津宮での現地大祭

沖ノ島

7月祭事暦

○毎月1・15日 月次祭
午前10時
高宮祭
第二宮・第三宮祭
引き続き
宗像護国神社
月命日祭(1日)
巡　拝 (15日)
午前11時～
総社祭
浦安舞 奉奏(1日)
豊栄舞 奉奏(15日)

○23日　午前9時
中津宮七夕揮毫会
於＝筑前大島 中津宮

○31日
午後5時
夏越の大祓神事
於＝神門前
引き続き　夏越祭
於＝本殿

宗滴

或る神職の方が癌を患われ、その体験を纏めた闘病記『がんに挑む』を読んだ。決して諦める事無く病と正面から向き合い、多くの療法を試み、家族も支えとなる姿の描写に共感する所が多かった。

その中では最新の医療技術「免疫細胞療法」について詳しく紹介されている。自分の細胞を一度取り出し、癌に耐え得る様に免疫性を高め体に返し病を克服させるという。

本の中では西洋医学とは「剛」、それに対し東洋医学は「柔」の姿勢で治療すると書かれている。抗癌剤は良性細胞も壊し放射線治療も体に悪影響を与え、まさに「剛」である。それに対し東洋の発想で癌と付き合い自然治癒を目指すこの療法は、柔軟性に富み画期的である。発展途上の技術とされるが患者の立場にすれば、闇の中での一つの光明として期待も大きい。

実は筆者も母が癌を患い大手術をした経験がある。著者の方同様、幸い手遅れとならず、今も母の明るい顔を見て幸せを実感するが、手術の際にはひどく動揺もし、改めて命の尊さを考え直す良い機会となった。

癌は今も、重病である。すぐには無理でも、諦めず病と付き合う気持ちが大切である。東西の叡智を結集すれば、克服も近づくであろう。

(D・S)

神具・装束　結婚式場調度品
福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31
電話 福岡(092)651-9456番
井筒 本店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入
電話 (075)341-3341(代)～4番
(075)343-3341番

木組の家　匠の技
総合建築業 株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元1025　電話(0940)32-2567

の煮汁で食べるソーメンに一同舌鼓を打ちながら、和やかな一時を過ごした。

正午、参加者は各船に乗り込み沖ノ島を一周、神秘的な景観を拝しながら帰路についた。

一方、沖ノ島に渡島出来ない女性・子供の参拝者は、大島の沖津宮遥拝所での祭典に参列し、遥か沖ノ島に祈りを捧げた。

午後二時、全船大島港入港、一人の病気・ケガ人もなく本年の沖津宮現地大祭は終了した。

尚、報道関係は朝日・西日本新聞、フジテレビ系のテレビ西日本放送が取材を行い、夕方のニュース、夕刊、翌日の朝刊で大祭の様子が伝えられた。

来年はいよいよ日本海々戦から一〇〇年目の沖津宮現地大祭となり、申込み者、取材関係等例年以上と予想されている。神社側も出来るだけ多くの参拝希望者を受け入れ、来年の沖津宮現地大祭を意義深いものとすべく、準備を進めている。

大島出港時の朝焼け

沖ノ島へ出港する男達を見送る女性達

沖ノ島

宗像市神湊の沖合い約六十キロ、玄界灘のほぼ中央に位置する、東西約一キロ、南北約〇・五キロ、周囲約四キロの島で、古代より大陸との交渉、国防の最前線。

宗像三女神のうち「田心姫神(たこりひめのかみ)」を主祭神として奉斎する、当大社沖津宮(おきつみや)が鎮座し、島全体が宗像大社の境内地である。住人はなく、辺津宮(へつみや)(九州本土)から神職が十日交代で常駐勤務している。島内は、七二科一八〇種に及ぶ常緑闊葉樹、亜熱帯植物の原生林に覆われており、大正十五年「沖ノ島原始林」の名称で天然記念物に指定されている。昭和四十六年には島全体が、辺津宮・中津宮境内と共に国の史跡に指定されている。

島の最高峰は海抜二四三・一メートルの「一ノ岳」で、この山の中腹に人の五倍はあろうかという巨石群(磐境(いわさか))が点在し、沖津宮御社殿はこの巨石と巨石の間に挟まれるように鎮座している。

昭和二十九年から、三次に亘る古代祭祀遺跡の発掘調査が行われ、四世紀後半～十世紀初頭まで大和政権による国家祭祀が行われていたことが判明。遺跡(二十三ヶ所)からは十二万点にのぼる銅鏡、勾玉、金・金銅製品、土器などが出土し、これらは全て国宝または重要文化財に指定されている。ちなみに現在でもよく使われる『海の正倉院』という沖ノ島を指す尊称は、この当時の毎日新聞紙上で報道されたことによる。

また、明治三十八年五月二十七日同島北西の方角で、我が国連合艦隊とロシアのバルチック艦隊が激突。当大社ではこの海戦をトして、毎年この日に「沖津宮現地大祭」を斎行し、一般の渡島が許される唯一の日となっている。

今から一〇〇年前の明治三十八(一九〇五)年、五月二十七～八日に、沖ノ島の北西の方角で行われた日露戦争最大の海戦。

この戦争で敗戦を重ねたロシアは、明治三十七年十月当時世界最強といわれたロジェストウェンスキー中将を司令長官とする「第二太平洋艦隊」(バルチック艦隊とは日本側がつけた通称)を編成し、バルト海のリバウ港からウラジオストック港に向けて出発させ、戦況回復を企てた。

東郷平八郎司令長官率いる日本連合艦隊は、バルチック艦隊がウラジオストック港に達する前に全滅させるため、連日作戦会議と猛烈な訓練が行われ、翌年明治三十八年一月二十一日鎮海湾の前線基地(現＝韓国)への集結が発令された。

そして五月二十七日未明、西対馬海峡で哨戒中の『信濃丸』から「敵艦見ゆ」との報告を受け、午前九時四〇分連合艦隊は「天気晴朗なれども波高し」の第一報を大本営に打電し、鎮海湾から出撃した。

沖ノ島近海で敵艦を認めた東郷長官は、「皇国の興廃此の一戦に在り、各

沖ノ島到着後、海中で禊をする参拝者

禊後、沖津宮への参道を登る参拝者

満喫!!宗像の海と魚 第七回 筑前玄海魚まつり 開催

今年も六月十三・十四両日、宗像市の鐘崎漁港をメイン会場、神湊漁港をサブ会場にして筑前玄海魚まつりが同まつり実行委員会(会長＝高崎弘美)主催で開催された。

この催しは『満喫!!宗像の海と魚』をキャッチフレーズに玄界灘とその荒波に揉まれて育った魚を一般の方に満喫してもらおうと、地元の漁師、漁業・観光産業に従事されてる方、青年団など郷土を愛する有志が中心となり開催し、今年で七回目となる。

メインイベント「魚のつかみどり大会」

鐘崎会場では、魚などの特産品販売をはじめ、多くの露店が店を出し、ステージではストリートダンス、小倉祇園・むなかた太鼓の演奏、各種ダンス、餅まき、船団紹介などで賑わいをみせた。両日とも昼から行われたメインイベントの『魚つかみどり大会』では、ブリやスズキ・サメなども放流され、大人も子供もびしょ濡れになりながら、夢中で魚を追いかけていた。

神湊会場では、魚販売は勿論、玄界灘クルージング、無人島『勝島』に渡っての勝島体験ツアー、魚さばき講習会、小アジ釣りなどのイベントが行われ、こちらも大盛況であった。

両日とも梅雨時期とは思えない程の雲一つ無い青空となり、両会場共に大変な人出で、特にメイン会場の鐘崎漁港では車が近づけない程の賑わいであった。

主催者側の発表では、両日の来場者は五五、〇〇〇人。昨年より一五、〇〇〇人の増加であった。このイベントが定着してきたこともあるが、今回初めて当大社大駐車場を臨時駐車場として開放したことが大きな要因のようである。

両会場は漁港であり、一定以上の車は駐車できないことが問題視されていた。そこで実行委員会は、事前に当大社駐車場が臨時駐車場になることをチラシなどで告知した。魚まつり来場者は、鐘崎漁港まで約六キロ神湊漁港まで約三キロあるが、当大社に車を置き貸切バスによるピストン輸送で会場に向った。

まつり閉幕後、御礼の挨拶に来社された主催者は、来年も多くの皆様に来場いただきたいと、すでに今年の反省点を見直し、早くも次に向けての改善点を熱く語っていた。

鐘崎会場全景

日本海海戦

員一層奮励努力せよの『Z旗』を掲げ、全軍の士気を鼓舞した。

やがて敵艦隊と対峙し距離を詰めていく。双方の戦力は日本が主力艦(大口径砲をもつ戦艦)四隻に対し、ロシアは新式が七隻に、旧式が四隻と倍以上の戦力差があった。

午後二時四〇分、東郷長官は敵艦隊との距離を六五〇〇メートルまで近づけるという海戦史上初めての敵前回頭戦法(東郷ターン)という画期的な海戦術で臨んだ。猛烈な訓練の成果もあり、連合艦隊から放たれる砲撃の命中率は高く、敵艦隊は戦列を乱して右往左往し、わずか三〇分で勝敗はつき、その後は、主力部隊や補助部隊が入り乱れての海戦が、翌二十八日まで続いた。

戦果を統合すると、ロシア主力艦三八隻の中、沈没二一隻、降伏・拿捕七隻、残り三隻の小艦艇が目的のウラジオストックに到達したのみであった。日本の損害はわずかに水雷艇三隻のみであった。現在でも、沖ノ島近海で漁をする漁師の話では、魚群探知機に沈んだロシア船の船影が映るという。

またこの海戦では、ロシア側戦死者四、五四五名、捕虜六、一〇六名、日本側の戦死者一一六名であった。

このように、日本海々戦は世界海戦史上稀なる完全勝利であり、日露戦争を勝利に導く上で決定的な役割を果たした。

さらに有色人種が白人に対して初めて勝利した瞬間であり、世界中に驚愕のニュースとして伝えられ、アジア・中東諸国では歓喜の声が湧き起こったが、当時同盟を結んでいたイギリスでは歓喜の声は聞こえなかった。

当時、ロシアの植民地であったフィンランドでは、日露戦争を契機に独立したため、東郷元帥を称えアミラーリ社から『東郷ビール』という同元帥の肖像が描かれたビールが現在も販売(今はオランダで製造販売)されている。

また、海戦当日は霧が立ち込め視界が悪かったが、戦闘開始時には突如霧が晴れ視界が開けたという、同元帥はこの神恩に感謝し、戦後当大社に同元帥の指揮された戦艦『三笠』(現在は横須賀港に展示)の羅針盤と、『神光照海』という揮毫を奉納され、現在でも当大社神宝館で収蔵展示している。

平成十六年 第一回氏子会総代総会開催

五月二十四日、当大社清明殿で評議員並びに総代百余名が出席し、氏子会総代総会が開催された。

本殿で正式参拝後、先ず来る七月の参議院議員選に立候補を予定されている、古川忠氏の後援会事務所より挨拶が行われ、参議院選への出馬表明と後援依頼を行われた。

総会は安部会長を議長に選出し、議事の審議に入り、事務局より平成十五年度氏子会事業・決算報告並びに、古屋敷監事より決算監査報告が行われ、全員一致で承認された。次に平成十六年度事業計画案・予算案の説明が事務局より行われ、こちらも全会一致で承認された。

また、今年は規約により役員改選の年にあたり、三役改選の件について協議が行われ、評議員会(三月十七日)で議決された会長・副会長・監事の留任・新任・退任と報告し、本議会にて全会一致のもと承認され新役員の就任が決定した。(別表の通り)

次に、氏子会費取り纏め依頼の件、六月の氏子会研修旅行参加申し込みの件等事務局より説明を行い、各総代へ協力をお願いした。

以上、議事はすべて可決承認され、氏子会総会は無事終了した。

	宗像市	旧玄海町	大島村	福間町	津屋崎町
会長	安部 照生（留任）				
副会長		岩佐 昭正（留任）	佐藤 千里（留任）	城野 寅夫（新任）	中野 政登（留任）
監事	古屋敷 清文（留任）	村田 政夫（留任）		大嶋 和敏（新任）	芹野 義信（新任）

出光タンカー(株)第五世『日章丸』宗像大神鎮座祭斎行

IHIマリンユナイテッド(広島県呉市)で建造中だった出光タンカー(株)定期用船の最新鋭原油運搬船『日章丸』が竣工し、去る五月二十五日午後三時より、同船操舵室の神殿へ宗像大神の御分霊を奉斎する鎮座祭、翌二十六日午前十時より鎮座奉祝祭が各々斎行された。

祭典は高向権宮司以下神職一名が出向奉仕し、鎮座祭では当大社より奉遷した御分霊を、同船操舵室の神殿へ無事奉安した。

翌日の鎮座奉祝祭には出光興産(株)代表取締役社長天坊昭彦氏、出光タンカー(株)社長米村頼之氏、日章丸船長神保和雄氏外乗組員・関係者が参列し、航海の安全を祈念した。続いて左右のブリッジで清祓の神事を行い、祭典は滞りなく終了した。その後、会場を祝賀会々場に移してのパーティーが行われ、一同で日章丸の船出を祝った。

日本船籍の出光丸・玄海丸・松寿丸・沖ノ嶋丸(他にもパナマ船籍のアポロ大島、アポロ赤間などがある)に続く、長い歴史を有するこの日章丸は初代から数え第五世。省エネルギー化の為に一軸に二重の反転プロペラを一基装着し、従来に比べ約一四%の省燃費を計るなど国内でも数少ない最新鋭機器を搭載している。

全長は東京タワーと同じ三三三メートル、幅六〇メートル、船上で野球が出来る程広い。約二〇七、〇〇〇バレル(約三三〇、〇〇〇キロリットル)という、我が国の半日分(〇・五日)の原油消費量を一回の往復で輸送する。

積荷港は中東地域で、祝賀会終了後の午後二時四〇分同船は呉港を出港。ラスタマラ(サウジアラビア)に向けて処女航海の途についた。乗組員は日本人六名、フィリピン人二十一名の混乗船で、約三十九日間かけて日本と往復する。帰国後は山口県の徳山製油所、北海道の室蘭製油所で各々原油を降ろす。

タンカーの寿命は凡そ二十～二十五年のようであるが、我が国のエネルギーを支えるタンカーとして、今後の活躍が大いに期待されている。

宗像大神の御加護の下、日章丸の航海安全、出光タンカー(株)並びに出光興産(株)の今後益々の弥栄を心より御祈念申し上げます。

九州市長会来社 神宝館を拝観

御由緒の説明をする高向権宮司

五月十九～二十一日九州・沖縄の九十八市長でつくる九州市長会(会長＝赤崎義則鹿児島市長)は、第九十四回市長会を宗像市で開催し、最終日に当大社へ参拝し、神宝館を拝観した。

十九日午後、九州・沖縄各地の九十市より市長・夫人・随行者一行約三〇〇名が、会議・宿泊場である宗像市の玄海ロイヤルホテルに到着し、理事会を行った。

翌二十日の総会では、一段と厳しさを増している自治体財政や地域経済を考慮し、『地方分権の推進と真の三位一体改革の実現に関する決議』を採択し、新会長には伊藤一長長崎市長が選任された(任期は二年)。

午後からは、総務省の担当者が三位一体改革について説明。続いて早稲田大学教授の吉村作治先生による「歴史遺産で町おこし～海の正倉院と古代エジプトの神殿～」と題した講演を行った。

二十一日は、午前九時『行政視察』の一環として当大社に参拝。高向権宮司以下神職の案内で境内を廻った後、昨日の吉村先生の講演に登場した『沖ノ島』で出土した、十二万点にのぼる国宝・重要文化財を収蔵する神宝館を拝観し、九州中の市長らは、質・量ともに優れた御神宝に見入っていた。

その後一行は、トヨタ自動車九州(鞍手郡宮田町)を視察し、グローバルアリーナ(宗像市吉留)で昼食をとり散会した。次回は十月に大分県別府市での開催予定となっている。

学芸員の説明に聞き入る赤崎九州市長会々長(鹿児島市長)

大社の御神宝12 ～昭和の御造営④～

今回ご紹介する撤下神宝は、皇大神宮別宮伊雑宮に奉納されていた御鉾である。

鉾は、実戦に使用する武器としては最古のものの一つであり、後に楯と併せて儀礼用に用いられ、即位の礼、大嘗祭などの朝儀には欠くことの出来ない威儀具になった。朝儀の際、大極殿の庭上に立てられる諸種の幡のうち、四神の幡の頂部には鉾があり、それらは議場にいかめしく飾られていた。

御鉾をはじめとする神宝の武器・武具類も同じく威儀具である。遷御の儀の際、新調した武器などを奉持した神職らが御神体を中心に列をなし新宮に参入してゆく様は誠に荘厳である。

一、御鉾　一竿　附比礼

皇大神宮別宮伊雑宮御料

この鉾は鉾身と柄、比礼からなる。鉾身は奥州月山鍛冶の末裔と伝えられる名工月山貞勝の手によるもので、刃長三〇・三cm、鍛えは板目に杢目まじりで刃文は細かい沸出来の直刃を焼いている。元々身の総体には金漆がかかっていたが、錆が目立つようになったことから現在は研磨を施した状態にある。金漆については『延喜式』に「金漆を塗れ」と定めてあり、錆止めの効果を意味する。その成分は明らかではないが、梨地漆を荏油で薄めた程度のものであろうといわれる。尚、皇大神宮別宮荒祭宮に奉献されるもののみ鉤が造り出された二叉鉾となっている。

柄は長さ二六九・七cmで、黒漆塗りに唐花の銀平文が施され、鏃はなく、頂にある金銅製の球状金具によって鉾身を受けており、その下端には石突をはめている。柄には裾が三叉形になった緋唐綾袷仕立ての比礼(＝薄く長細い布帛)が垂れている。この比礼とは「ひらめく」の意味で、裾を三叉形にしているのは風に靡く形象化とみられる。比礼の中央両面には銀銅の鞆絵(＝巴)が張られ神器にふさわしい威厳を放出している。

御鉾　一竿　附比礼　皇大神宮別宮伊雑宮御料

（続）海の寄物 185

いしい ただし

「津屋崎町はいいことをしたですなあ」と見学者の中から聞かれた。

さて津屋崎小学校内にある遺跡の正式の名称は、在自西ノ後遺跡という。

遺跡は玄界灘から約八〇〇m入った海抜約三mの低地にある。小学校と西側の田圃との間に段差があり、遺跡は海岸線に接するか、近い位置にあったようである。

唐坊地の名が残り、調査で多量の貿易陶磁器が出土し、磁器片のなかに綱の文字を墨書したものがあった。綱とは宋の貿易商人の綱首と関連が考えられる。ここが日宋貿易との関わりの地であることが強まってきた。

墨書磁器と木簡 右下 宗銭(元祐通寶)

平成一三年に南校舎の建て替えが検討され、平成一四年から調査がはじまった。井戸・溝・土壙が検出された。貿易陶磁器も多量に出土した。

中世の唐坊、すなわち中国人の居住地であることは間違いなく、貴重な遺跡という認識が町内外からも高まり、町は一五年に町指定史跡にした。補足調査を行い、遺跡が小学校校舎にあるため、そっくり遺構を検討され、決定を見たのである。校舎建設とともに整備がすすめられ、今年四月に開館となった。

二次で約七二〇m^2、三次で約六〇〇m^2の調査が行われ、溝状遺構一〇条、土壙三基、井戸三基、ピット（小穴）は多数検出された。貿易陶磁器は一二世紀後半が主体で、一部一三世紀を下るものという。

遺物は「綱」「千王」「壽」「大」のある黒書磁器、楠葉（くすは）型瓦器（がき）片（畿内系の瓦器）で、枚方市楠葉東遺跡が生産地で「その生産と流通の背景には直轄荘園を通じた摂関家の関与を想定している」（中世土器研究会編）という特殊な土器も出土した。報告書には金玉満堂の銘を刻印した龍泉窯系青磁も出ている。

溝は十条検出されているが、溝の中に四〇〇cm、深さ七〇cmと大きなものがあり、溝から青磁類の器種が豊富でしかも完形、もしくはそれに近い磁器が出土しているところから、近くに建物がある可能性がある。調査では建物の遺構は見つかっていない。井戸には三基、一つの井戸には完形の土師器の坏や皿がまとまって出土しているところから、井戸を埋める時の宗教的儀式をしたことが想定される。

木簡が二点、一点は銭の付け札で、表に銭の数量を、裏にその使用記録が記されている。

もう一点は文書木簡で、縦二七五mm、横五二mm、厚さ四mm、下部は欠損。表には「□きのかた□□□□／□かりつくり□□□□／さの□□□くきほ□□」、裏には「このくきのかた□くり□／□□□□いそき□□□／十二月初三□□ 虎」と墨書されている。裏面の最後の行は、手紙の差出人と日付。文中の「いそぎ（急ぎ）」から急用を要する手紙（在自西ノ後遺跡Ⅱの報告書）□□はどんな文字が入るのでしょうか。

平成十六年度宗像大社奨学金受給生便り②

東海大学第五高等学校 一年 竹本 満（福間東中学校卒）

私は、将来漁師になろうと思っています。その為には、今通っている水産高等学校で船の免許を取らなければなりません。日々、船のことについて詳しく勉強しています。

まず、船の動力になるエンジンについてですが、この間学校の授業で、『船外機』を初めて自分の手で動かしました。その時はとても嬉しかったです。

今の日本の漁船はハイテクです。搭載されている機械には、魚の群れを見つけるための『魚群探知機』、一度とれたポイントを入力する『電子地図』などがあります。勿論、船の動力になる『エンジン』や、アナログな天気を知るための『ラジオ』、中間との連絡をとるための『無線機』なども搭載しています。

しかし、実際の漁場では一度とれたポイントでも、次は漁れるとは限りません。ハイテクとアナログを駆使し、色々な場所で漁ってみてよく漁れる場所をポイントとして自らの財産にしています。

私もはやく立派な漁師になれるよう、これから水産高等学校でしっかり勉強し、玄界灘の荒波に繰り出したいと思います。

福岡県立福岡工業高校 三年 新枦 宏（福間中学校卒）

私は、小学校三年生から野球を始めても十年目になります。今は、公立では一番とも言われている福岡工業高校の野球部に所属し、甲子園目指し日々練習しています。自宅からは一時間弱と少し遠いけど、『甲子園』という夢の舞台に行くためには、そんなのは全く関係ありません。

今年のチーム力なら、出場できる力を持っていると言われています。そしてどのチームにも負けないチームワークが良く、常に挑戦者としてチャレンジャーとして戦っています。私が野球をやり始めて学んだことは沢山ありますが、特に挨拶などの礼儀作法では、親からも変わったと褒められました。監督さんは「今、学んだことは将来必ず役に立つ」が口癖です。今はまだ分からないけど、監督さんやコーチ、チームメイトを信じ、今の練習は本当にきついけど、夏に絶対笑えるようにどんな練習にも耐えています。

また、今私が全力で野球に打ち込めているのは、全て母親のおかげです。朝早くから弁当を作ってくれたり、夜遅く帰ったときも食事を作ってくれ、本当に感謝しています。そのためにも自分が甲子園に出場することが、最高の親孝行だと思います。そのためにも必ず甲子園に行きます。最後にこれから、夏の大会に向けての貴重な一日を、悔いのないよう全力でいこうと思います。宗像大社の神様、見守っていて下さい。

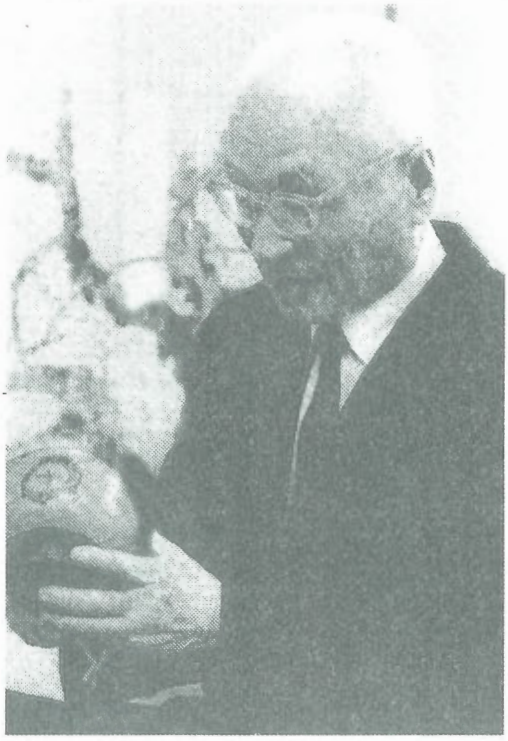
決断力
その時昭和の経営者達は

瀧口凡夫

出光興産株式会社

出光佐三 店主 その16

業界の雄への飛躍⑤
～「事業の芸術家」目指して～



69年5月ごろ、唐津焼の茶碗を手にした佐三
(主婦の友写真部撮影 ◎主婦の友)

一流の経済人で書画、陶磁、茶道など芸術文化の分野で、自らが高い境地に達したり、支援のために私財を投じたりした例は多い。世間一般は、これを趣味人または文化活動の支援者として評価する。

しかし、いわゆる功成り名遂げたあとの「余技」としてこれを見るだけでは、極めて不十分だと筆者は思う。とりわけ佐三の場合、美術との対話、交流が事業理念の練りあげと実践に深く結びついている。

佐三は鈴木大拙博士(学士院会員)らと座談会の中で「ほんとうを言いますと、この画を私が二十歳のころ初めてみて、しかも恋をしたんです」と語っている。「この画」というのは仙厓の「指月布袋(しげつほてい)」である。

仙厓は江戸中期の禅僧。栄西が開いた博多聖福寺の住職で、詩文、書画をよくした。

没後、仁孝天皇から「普門円通禅師」の号を贈られたほどの高僧である。とくに画は、禅の神髄を表現したものとして有名である。

佐三は「指月布袋」にひと目惚れし、以後は仙厓から離れられなくなった。

画には、袋を左手に持った布袋さんと子供が描かれている。布袋さんの右手は遠く高い月を指している。子供の目は月を見ず布袋さんの指先にとまっている。

戦争中に佐三が、この画を引用しながら大陸で働く従業員たちに訓示をしたと先に紹介したが、その意味は目先の小さなことにこだわらず、出光の理想をしっかり見据えて進め、ということであった。

佐三の子息の出光昭介会長は「私が小さいころ、門司で年一回虫干しをやるときに、家中いたるところに仙厓などの軸がかけてあった」と語っている。佐三は旅行から帰って「仙厓の画が二つか三つ届いていないと寂しがった」という。

やはり、創業まもなくのころ、佐三は「商売は自分がもうかれば相手が損をする。無意味なわざではないか」と悩んでいる。およそ商売人らしくない悩みだが、佐三の真骨頂はここにある。

やがて第一次世界大戦が起こり、石油が投機の対象となり値上がりする。品物も不足するが、佐三は同業者からの転売品を買ったりして、消費者への安定供給に努めた。利幅は少なかったが、佐三は「これが商人の道だ」と納得するのである。

佐三の文章を引用する。

「こんなことから私は、芸術には美、創作、努力が伴わねばならぬ、と素人観を定めた。国家社会とともに歩く、これは事業の美であり、大地域小売業、これは創作であり、卑近にしてしかも困難なる小売業の実現、これは努力である。これが出光の事業であり、事業の芸術化である、との信念を得ることとなった(一九五九年=昭和三十四年、訓示)

出光美術館は六十六年に開館、仙厓を初めとする日本の書画、陶磁、中国や朝鮮など東洋の古美術、それにオリエントの出土品、ルオーの作品などで知られる。初代館長は佐三、その後は昭介会長が引き継いだ。

平成十六年度 夏越(なこし)の大祓(おおはらえ)神事 御案内

恒例の夏越祭が近づいて参りました。このお祭りは、大祓神事を中心に行われ、夏季に流行する悪疫を除去し、皆様方の心身の罪・穢を人形に託して祓い除き、清々しい気持ちで、毎日を無事に過ごしていただくための祈りを込めた神事でございます。

本年も左記の通り斎行致しますので、皆様お誘い合わせの上御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

一、日　時
　七月三十一日
　午後五時～

一、場　所
　大祓神事（神門前）
　夏越祭（本殿）

氏子・崇敬者　各位

宗像大社

第五一五回 宗像大社歌会詠草

大野展男選　毎月25日〆切

田熊　有田　ゆり子

潮の香の残れる若布熱湯に春さきがけの緑をひらく

(評) 宗像大社が皇室へ毎年献上している若布も、門司の若布刈神事の若布も寒風すさぶ頃のもの、この一首の若布も春まだ寒い頃のものであろう。それを「春さきがけの緑をひらく」と詠った感覚の冴えは見事である。

大島　越智　治子

岸近き岩場につどふ鷗の群波荒き日はひたすらに啼く

(評) 夏、カムチャッカなどで繁殖し、冬に日本に現れ全国の海上に群棲する鷗。作者の住む大島にも沢山飛来するのだろう。この一首にはその鷗たちに注ぐ温かい目差しが感じられ、そこがいい。

大島　杉田　禮子

歩みとめ振りむく夫に手をあげて新緑の丘ゆっくり登る

(評) いたわり合う二人の上にゆったりと流れる時間が感じられる作品、鶯や雲雀の声も聞えて来るようである。

日の里　石松　弘次

待合室にでんと居座る大時計ポアンポアンと刻知らすなり

(評) 杉田作品とは反対に、いらいらとした時間の流れる病院の待合室。それをなだめるがごとき大時計の音、作者もひとときに己の時間と心を取り戻した事であろう、単純に述べながら深みのある歌である。

東郷　山口　節子

野いばらも薊も棘が手強きか牛が食べ残す大島牧場

(評) 牛たちには迷惑な存在かも知れないが、野茨や薊の花が牧場を彩どり海風が吹き通っているのだろう。大島牧場の固有名詞が一首のなかで効果的である。一度尋ねて行きたい気持にさせる。

田野　森　甲子

山深き地蔵峠の七曲り目覚るやうな若葉愛でゆく

朝野　藤井　浩子

田を鋤ける傍の道にあま鷺の数羽がをりて道変へ歩く

神湊　中山　千鶴

ふるさとを訪ねるバスの車窓より仰ぐ福地の嶺は変らず

田野　森　つるの

庭木の中王者の如く高く咲くひとつばたごは対馬の土産

大井　木原　房子

歯の治療まつ椅子にゐて目をつむりわが心音を久々に聞く

池田　森　龍子

藍染めの手提げを持ちて野路をゆく横手に薊の花眺めつつ

福間　池浦　千鶴子

夏近き植田のみどりは日毎増しけさは白鷺餌をとるらしも

東旭ヶ丘　天野　玲子

血液検査異常なければ帰り道思わず買いたりアイスクリーム

日の里　大和　美由紀

万緑の風に吹かれて高高と声張り上げて鶯鳥鳴きをり

福間　中村　勇

不戦憲法かなぐりすてて外つ国に重装備なる自衛隊出す

津屋崎　佐々木　和彦

てんぷらの料理が一番美味しいととげある棘の芽摘みている妻

浮羽　向　則正

万緑を分けて流るる山の瀬は白く泡立ち水音高し

光岡　佐藤　純一

好きな娘にクラジオラスの一束を手わたす時の互みの笑顔

王丸　小方　玲子

職退きて慣わしとなる散歩路の土手の野いちご紅く色づく

選者詠

嵩をなす楠の花殻城内を吹きゆく風の行き止まりか此処

万緑の阿蘇をトロッコ列車ゆく扉をしばる鎖鳴りつつ

朝まだ日差しとどかぬ森のかげ池の蝌蚪らは動き少なし

宗像大社 歌会 俳句作品集(四九〇)

福間　森　清

親子して跳ねる気持の五月旅

光岡　井上　嘉治

匂薬を酒杯に差して歌寂し

東郷　田中　憲象

山城の石落し坂椿敷く

光岡　白土　凌一

新緑に心もはずむ夏の朝

日の里　花田　いつ枝

熱弁のガイドに笑窪風薫る

東郷　宗風社俳句会　吉武　湧泉

立春や百姓百品種選ぶ

吉田　杏子

降る雨に濡れてひそやか著莪の花

三浦　美千代

思ひ出のなき母の墓遠霞

田中　雨葉

梨花月夜浅瀬早瀬の水の音

木原　房子

母の里の川は悠々遠霞む

編集後記

先月号から『奨学金受給生便り』を掲載しています(今月は6面)。当大社奨学金を受給している子供達からの作文で、現在も続々と寄せられています▼四月末の説明会の様子では、返事もまともに返ってこず正直言って「今の子供達は…」と感じましたが、送られてくる作文を読むと学校・家庭・将来のことと、皆いろいろ悩み考えながら、それぞれ事情は様々だが明るい未来を追っている姿に感服しております▼梅雨とは思えぬ暑い日が続いておりますが、氏子・崇敬者の皆様には、体調を崩さぬよう、くれぐれも御身ご自愛下さいませ。(M・O)

発行所　宗像大社社務所　宗像会

〒811-3505　福岡県宗像市田島
電　話　0940-62-1311(代)
発行人　伊藤佳和
編集人　大塚宗延
制　作　ジーエータップ
印　刷　ゼネラルアサヒ

定価1年送料共1,000円